食事とリハビリ

3階病棟　玉井　朝美

当病棟では30名の患者が日々リハビリに励む中で多目的ホールに集い、看護師・セラピストの見守りの下昼食を摂ります。皆で集い顔を合わせて食事を摂る事で患者同士のコミュニケーションが生まれ自然と笑顔になります。もちろんスタッフと患者との笑顔の会話も増えてきます。

その笑顔が活気となりリハビリに対する意欲へと繋がって行きます。食事の持つ効果って本当に大きいですね。患者さん達は日々自分の病気に対する不安を抱えながらも一歩ずつ前へと進んでいます。私たちスタッフは笑顔でサポートをモットーに患者１人１人に接しています。これからもスタッフ一丸となりがんばっていきたいと思います。

よろしくお願いします

New Face

佐藤　三恵子

４月から回復期病棟で看護師として勤務しています。毎日リハビリをして努力して、笑顔で退院していく患者さんの姿にとても勇気づけられています。たくさん勉強をして、何か力になれればいいと思っています。

秦　世清

５月より回復期病棟で勤務しています。患者さんのリハビリする一生懸命な姿や回復していく姿が私の励みになります。まだ、不慣れな面もありますが、先輩方のご指導のもと頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

阿蘇野　泰幸

今年の６月から看護師として回復期病棟で勤務しております。看護師には京都の学校を出て、しばらく働き里帰り後、明野中央病院でお世話になっています。

男性看護師はめずらしいと思いますが、患者さんが快適に入院生活が送れるよう精一杯頑張っていきたいと思います。

寺岡　涼子

今年の６月から言語聴覚士として当院に勤務しています。毎日笑顔でがんばりたいと思います。宜しくお願いします!!

医療法人社団 唱和会
明野中央病院
日本医療機能評価機構　認定病院

診療科目　内科・消化器内科・リウマチ科・整形外科・形成外科
リハビリテーション科・麻酔科（森 正和）
病 床 数　75床〔2F／一般病棟45床（亜急性期病床10床含む）
3F／回復期リハビリテーション病棟30床〕

発行日　2012年10月
発　行　明野中央病院
回復期リハビリテーション病棟運営委員会
〒870-0161 大分市明野東2丁目7番33号
TEL 097-558-3211（代表）FAX097-558-3709
URL http://www.coara.or.jp/~akenohp/
E-mail akenohp@fat.coara.or.jp

◎回復期リハビリテーション病棟に関するご相談、お問い合わせは**地域医療連携室 佐藤**まで◎

明野中央病院 回復期リハビリテーション病棟 広報誌

あけのスケッチ

AKENO vol.10 SKETCH

自立した生活のために

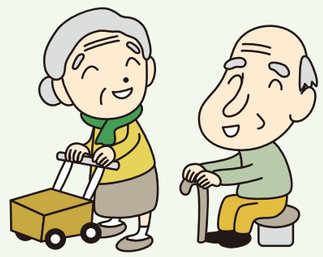
院　長　木下　昭生

2004年をピークに日本の人口は減少していますが、その人口に占める高齢者の割合は増大しています。国の推計によりますと、1990年に約400万であった75歳以上の人口が2007年1270万人まで増加、さらに2030年には2300万人まで増加し、生産年齢人口（15～64歳人口）の減少とあいまって2055年には、全人口の4分の1が75歳以上の高齢者となると推計されています。

このような少子高齢化社会の進行のなかで、医療費の適正化という旗印の下で進められている医療構造改革の大きな柱として、医療の連携（機能分化）があります。その一環が、回復期リハビリテーション病棟です。すなわち、急性期病院で治療を終えた患者さんは、できるだけ早期に回復期リハビリテーション病棟に転院(又は転棟)し、機能回復を目指したリハビリを行なうよう急性期と回復期の連携が行われています。回復期リハビリ病棟では、患者さんの機能回復のために1日のなるべく多くの時間をリハビリにあてるように、日常生活がきちんとできるように、休日でもリハビリができる体制をとるなど医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、看護師、栄養士さらには薬剤師が協力してさまざまな工夫をしています。ただし、回復期リハビリ病棟に入院できる期間は限られており、その後の介護保険を用いての在宅リハビリも重要になります。

2000年に、介護保険サービスの受給者は介護保険制度が開始された2000年149万人から2010年には403万人まで急増し、65歳以上が支払う介護保険料の全国平均月額は、平成12年の2900円から5000円弱まで増加し、そろそろ限界に近づいているとの声もあるようです。そこで今、介護保険は、その基本理念に戻り、高齢者でも“有する能力に応じた自立した日常生活を営むことができるよう”になるサービスの提供に回帰しようとしています。すなわち、回復期リハビリを終え、家に帰ってもできる限りリハビリを続けて自分でできることを保とうということです。

リハビリは、基本的には「日常の生活を行う」ために行うもので、それを通じて少しでも自分で動ける体にし、体の自由と心の自立をもって本当の自立が生まれるといわれています。回復期リハビリ病棟を退院したらそこでリハビリが終わりではありません。家に帰ってからのリハビリこそが自立への道ということを強調したいと思います。



The Road to Switzerland ～夢を叶えるために～

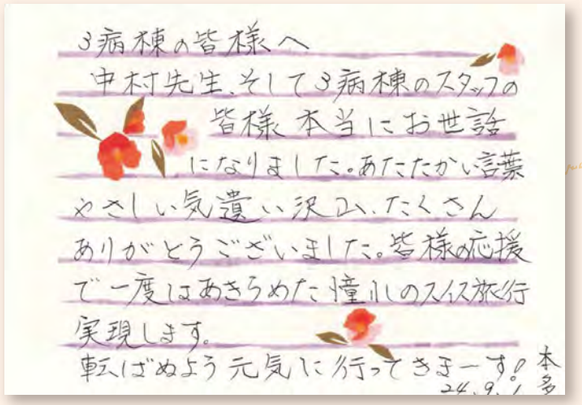
理学療法士　紺野　真

当院主催のリウマチ患者と行く スイス旅行“Akeno クララ元気ツアー（9/1～9/7）”から遡ること1ヶ月前、発起人の一人である本多さんが大腿骨の骨折で当院に入院、緊急手術するという非常事態が起こりました。手術は無事成功し、翌日からリハビリが始まり、私はその一役を担うことになりました。通常、大腿骨骨折後のリハビリは早くても約1ヶ月かかります。藤川先生を始め、医療スタッフは本多さんがスイスに行ける状態まで回復するのか判断するのは正直、困難な状態でした。

しかし、当の本人は自分の夢の実現のため、そして他のリウマチ患者を勇気づけるためにも「旅行に行くために今何をしなければ良いか」とスイスに行くことを前提に、きついリハビリに弱音を一切吐かず、一生懸命取り組まれていました。実際、旅行代金が術後数日後に支払われていたことからもその気持ちが伺えます。絶対にスイスに行くという強い信念を持った本多さんの回復は予想以上に早く、術後3週後には杖なしでも歩けるようになり、階段や日常生活の動作も一人でできるまでになりました。リハビリ中、本多さんは結婚から妊娠・子育て・長期に渡る入院生活に至るまで様々な話をしてくれ、スイスに行くことにどれ程深い意味があるのか私なりに理解することができました。

万全を期して出発当日の午前６時に退院し、スタッフは杖やステップ・シャワー用の椅子・車椅子・医療器具・薬剤等必要な道具を最終確認し、無事スイスへ旅立つことができました。

私はこのスイス旅行を通して理学療法士として多くを学んだのと同時に、参加者一人一人が今できる最善を尽くした結果、この一大プロジェクトを成し遂げたことに生涯忘れることのできない感動と感謝の念を深く心に覚えました。皆様、ご苦労様でした。また、次回を期待したいですね。そして何よりもありがとうございました。


3病棟の皆様へ
中村先生、そして3病棟のスタッフの
皆様 本当にお世話
になりました。あたたかい言葉
やさしい気遣い沢山、たくさん
ありがとうございました。皆様の応援
で一度はあきらめた憧れのスイス旅行
実現します。
転ばぬよう元気に行ってきまーす！ 本多
24.9.1

◀本多さんからの手紙

「ソーシャルワークとリハビリテーション」～カンボジアの青年に学んだこと～

地域医療連携室　佐藤　善紀

将来、福祉の仕事に就こうと決めた学生時代、私は日本国際救援行動委員会というＮＧＯに所属し、国内外の様々なボランティア活動に参加してきました。その活動のひとつとして、カンボジアの首都プノンペンに学校の校舎を建てるお手伝いに行った時のことです。

およそ3週間にわたって実施された作業の合間に、現地の障害者が通うリハビリセンターを訪れる機会がありました。そこは障害を負った若年者の方が木彫や皮工芸、リサイクルなどの作業を行いながら、社会復帰へ向けて訓練を行う場所でした。

カンボジアでは、長く続いた内戦で400万個～1000万個の地雷が敷設され、その埋めた場所も不明となっています。障害を負う原因としてはこれらの地雷や不発弾による被害が最も多いとのことでした。

この国では1975～79年のポルポト政権時代に国民の20％にあたる人々が国家により虐殺されたという悲しい歴史も背負っていました。私はそのような国でさらに障害を負って生きていくことは輪をかけて辛いことだろうと考えながら見学をしていました。しかし、そこで訓練を受けていたある青年は、壁に貼られた一枚のポスターを指さし、嬉しそうに「僕はこの大会に出たいんです」と教えてくれました。

それは「大分国際車椅子マラソン」の案内ポスターでした。故郷のイベントが遠くカンボジアの青年を勇気づけていることにも感動しましたが、過去に自分の身に起こったことはそれとして、どんな境遇にあっても、今できること、やれることの中に生き甲斐を見いだして生きている彼の姿勢に、人間の心の強さを学んだように思います。

あれから十数年後、縁あって車椅子マラソンの普及に尽力した中村裕博士を創始者とするこの病院で働くことになりました。私も怪我や病気で元気を無くしている方へ、その人が今できることを一緒に考え、強さや希望に変えることのできるソーシャルワークを心がけていきたいと思います。